
マルティーン・ヴァルザー 『正当性証明（義認）試論』について

洲 崎 惠 三

要約

現代ドイツを代表する作家 Martin Walser (86歳) の2011年11月9日 Harvard 大学招待講演『正当性証明（義認）について——試論』は、「正当性が認められること、それはかつて最も重要だった。国家は法によって、政府は選挙によって認定される。しかし個人は何によってか？」と問う。国であれ個人であれしばしば権力と結びついて我の側にのみ正義ありとする独善 (Rechthaberei 自己正当化) がはびこる時代風潮に雷光を発したのが Karl Barth である。義認 (正当性判定) の権限は神のみであって、人間にはないという、Paulus, Augustinus 以来の教えを忘れてはいけない。Luther や Max Weber は信仰や業績という人間の努力による神の恩寵への道を見出そうとした。しかし資本主義の精神的地盤たる神への信仰やエトスが失われていくと、正当性判定は自力による時代精神が広まる。神の不在、欠如に安住せず、未来に新しい神の甦りを望んだのが K. Barth や Nietzsche である。不可視、未知の神への道は、希望なき希望の信仰 (K. Barth) という否定弁証法運動のなかにしかない。世界と人間存在の正当性認定は、バルトは神の恩寵、ニーチェは美による。美的現象としてのみ生は是認される。ヴァルザーは、欠如から生み出される言葉こそ神のような創造に通ずると言う。

キーワード：1. 正当性証明 (義認) 2. 自己正当化の時代 3. Karl Barth 『ローマ書』, 義認は人間ではなく神の権限 4. 否定弁証法運動 5. 世界と現存在は美的現象としてのみ是認される

序：2011年11月 Harvard 大学招聘講演『正当性証明（義認）について——試論』

2011年11月9日、Harvard 大学の招聘に応じ、Martin Walser は『正当性認定について——試論』という講演を行った。これは現代ドイツを代表する86歳 (1927年3月24日生まれ) の作家の生の総決算の一つ、ないし遺言ともいえる。そのテキストは、翌日11月10日付 *Frankfurter Allgemeine* 紙の文芸欄 (Feuilleton) に掲載された。2012年初春には Berlin, Humboldt 大学神学部でも講演、2012年3月 Rowohlt (Reinbek) 社から単行本として上梓された。インターネット上の FAZ 版と刊行本の間にはかなりのページにわたる改訂増補がある。

この高度なエッセイとも論文ともいえる Poeta Doctus の本著は、日本にまだ十分紹介されていない Martin Walser 文学の扉を開ける格好の鍵ともいえる。まず論点の把握から始める。増改訂に

より補強された部分は二つある。原著の核心でもある。

第1：正当性認定（義認）は、だれが何によって行うのか？ Paulus から Augustinus を経て Karl Barth に至る本著作の主題 *Rechtfertigung*（義認，正当性証明）は，神の恩寵（恩恵）であり，人間の権限外にあるという部分。

第2：Karl Barth と Friedrich Nietzsche の類似性。すなわち，

- 1) バルトの Esau と Jakob，目に見える現実の教会と目に見えない根源の教会の対比は，ニーチェの Apollo と Dionysos の原理に重なる。
- 2) 欠如こそ創造の母胎，過去の神の死こそ未来の未知の神の蘇生。神の不在と遍在，不可視と可視，人の不信仰と信仰，絶望と希望，死と生の絶えざる否定弁証法運動。
- 3) 世界と人間存在の正当性認定は，バルトは神の恩寵，ニーチェは美による。ヴァルザーは，言葉こそ神のような創造に通ずると言う。

本稿もまたこの2点に重点を置きたい。

1. 正当性認定・義認（*Rechtfertigung*）と独善・我に正義あり（*Rechthaberei*）

しかしまず，標題の *Rechtfertigung* とは何か？ ラテン語 *justificatio*，英仏語 *justification*。動詞 *rechtfertigen* = *justify*。行為，主張などを正当化する。正当性（義）の認定，根拠づけ，証明，証拠，ないし弁明，弁護。宗教用語ではプロテスタント「義認」，カトリック「義化」。政治的に使われれば「錦の御旗」「大義名分」ともいえる。

「義認」は神の専権事項，すなわち恩寵（*Gnade*）によるものであって，人間はその信仰や業績（*Werk* 業，所業，行為，仕事）によってもそれに参画できない。それが Paulus から Augustinus を経て Karl Barth にいたる神学の源流である。

国であれ個人であれ，我の側にのみ正義ありという時代の風潮は，神のない時代における *Rechthaberei*（自説こそ正当性ありとする独善ないし自己正当化）であって，いわば人間の数だけ正当性主張が存在する。

自説への反論，否定可能な論こそ，正当性探求の出発点ではないだろうか。

希望なき希望をもつ信仰，神の欠如を感じればこそその神への希求，目に見える Esau の教会の奥に目に見えない Jakob の教会を，光の現象 Apollo の裏に根源的カオスの Dionysos を見ぬく，この否定弁証法運動のエネルギーこそ，言葉や芸術の生命である。すなわち「世界と現存在ははただ美的現象としてのみ，正当化（存在証明）される」（ニーチェ『悲劇の誕生』N. I, 14, 40, 131）。

2. Franz Kafka の負の自己意識

講演は「正当性が認められること，それはかつて最も重要だった。国家は法によって合法認定がなされる。政府は選挙によって。しかし個人はどうか？」(7) という問いかけから始まる。

自己の生の正当性証明が欠如していると感ずるゆえに，これを最も良心的に行ってもむなしかっ

た小説が Franz Kafka の『審判』（*Der Prozeß*）であると、M. Walser は言う。「正当性証明（義認）という領域への命知らずの言語冒険を行った作家であり」、「いわば良心の棒高跳び」（99）であるという。『変身』もまた、一家の経済を支える大黒柱のKが面妖な害虫に変身した自分を発見したゆえに、家族の寄生虫でしかありえない自らの存在理由を悟って自らを死に至らしめる。Jean Paul, Dostoevsky, Robert Walser, Kafka などの系列は、自らにとり正当性認定はもはやないという自己認識において、きわめてラディカルである。自己の正当性を弁明しようとすればするほど、その正当性がないように意識される。それは自分の生の認可剥奪、ついには自己処刑へと至る。自己否定への肯定である。M. Walser はこれを負の自己意識、自己否定のイロニーの系譜と名づける。そして Friedrich Schlegel から Thomas Mann に至る正の自己意識、自己肯定のイロニーの系譜に対置した。しかしこの自己の正当性否認、自己否定意識より長く生きのびる自己意識はないという。1970年の Frankfurt 大学講義『自己意識とイロニー』の核心である。ソクラテスやイエスが数千年の過酷な時間の浮沈をくぐりぬけ現代の人びとの心のなかにもなお息づいているのをみれば、M. Walser の主張が逆説的で安直な否定弁証法であるとは少なくともいえないだろう。

3. 大義名分の時代精神

正当性が自他ともに認められていると感じている人の例に、M. Walser は社民党有力議員で世界飢饉問題の権威といわれる Jean Ziegler と、ドイツ大統領 Joachim Gauck の講演をあげる。正義は私の側にあり、自説は正しくなければならぬということを要求する時代精神には、しかしむしろ神なき義認（正当性認定）という時代の貧しさが示唆されているのではなかろうか、と言う。

M. Walser は、Vietnam 戦争、ドイツ再統一問題、Auschwitz というドイツの罪過について、マスコミなどに代表される時代精神によって、コミュニスト、ナショナリスト、反ユダヤ主義者として非難された。その反論はすべて可能であるが、問題は「つねに正しくなければならぬ」（*Rechthabermüssen*）という時代の精神風土である。各自の主張する説は、人間の数だけある。だが正しさを判定できるのか。世論？ マスコミ？ 時の権力？

古来正当性認定は、宗教的なもの、すなわち義認できるのは人間ではなく、神だけであった。「宗教のない正当性認定（義認）はひとりよがりの自己正当化・独善（*Rechthaberei*）となる。ずばりいえば、自説が正しい（*Rechthaben*）ということへと貧困化している。」（32f.）だれもが自説を正しいとする。正しいことを要求される。しかし正当性（義）の判定ができるのはだれなのかを、忘れてはいけない。

4. 正当性判定・義認するのはだれか、Karl Barth『ローマ書講解』

だれが正当性（義）を判定できるのか、人間はどのようにして正当性認定（義認）を得ることができるのか、われわれが義認されうるのは、われわれが行うこと（行為、業績）によってなのか、あるいは信ずること（信仰）によってなのか、という問いは古来絶えることがない。Paulus,

Augustinus, Calvin, Luther を経て現代で最もこの人間の根源的な問いを深めたのはスイス Aargau の牧師だった Karl Barth (1886~1968) である。

Karl Barth の『ローマ人への手紙講解』(*Der Römerbrief*, 第2版1922, 以下『ローマ書』)は、義認が人間の必要不可欠の欲求であったことを忘却させる現代の書割文化の破壊を執行した、と M. Walser は言う。自分が正しい、正義は我が側にありとする時代風潮は、義認ではない。「一種の意識の帝国主義である。しばしばそれは権力や権力感情と結びつく。日和見主義的、ご都合主義的な時代精神である。政治的正義とは手なづけられた良心、正当性認定(大義名分、錦の御旗)のマスターキーにはほかならないのではなからうか?」(29) 国家や組織や個人間の戦いには、権力であれ反権力であれそもそも力は、いかに錦の御旗を必要としたか。正義はどちらの側にあるか、それを判定するのはだれであるか、という問題はいまなお存続しつづけている。

5. 神の恩寵, パウロ (Paulus) 『ローマ人への手紙』第9章

パウロの『ローマ使徒への手紙』第9章が核心である。旧約聖書創世記 (*Genesis*, 25, 23~34) によれば, Isaak の妻 Rebecca は双子を身籠るが, 兄(長男 Esau) が弟(次男 Jakob) に仕えるであろうと, 主は予言する。まだ二人は生まれてもいないし, 善も悪も行っていないのに, 選別があり, 家督相続の正当性認定が行われるのである。「パウロのローマ人への手紙」*Römer*, 9, 10~12)

パウロによれば, 正当性認定(義認 *Rechtfertigung*) が得られるのは, その人の所業 (*Werk* 仕事) によってではなく, 召すか召さないかを定める神によってである。(*Römer*, 9-12) 「Esau は Jakob の兄ではないのか? …されど我はヤコブを愛し, エサウを憎みぬ」(マラキ書 *Maleachi* 2-3)。神の自由裁量と予定が, 人間の運命を左右する。祝福されるのか呪われるのか? 「我は我が望む者に憐れみを施し, 我が望む者に恩寵を示す」(*Römer*, 9,15) それは不公平ではないだろうか? 選ばれなかった人は怒り, 選ばれた人は喜ぶ。しかし怒ったり喜んだりするのは人間である。神は陶工であり, 人間は陶土にすぎない。(*Römer*, 9,19~23) 選抜, 召命, 義認できるのは, 神であって, 人間ではない。

パウロの数百年あと北アフリカの Hippo の司祭 Augustinus もまた『ローマ書』第9章のこの主題と取り組んだ。神の選抜・義認は, 神の自由意志, 恩寵によるのであって, 人間の業 (*Werke*) に基づいてなされるのではない。「さもなければ恩寵はもはや恩寵ではない。」(*Römer*, 11, 6) 選ばれた者は少ないが, 選ばれなかった者は多い。どんな人間も, 自分が救われる者なのか罰せられる者なのかはわからない。陶土から幸と不幸の器ができる。神は公正なのだろうか? 「神に不正があるとでもいうのか? とんでもない!」(9-14) とパウロは言う。人間の運命を決定するのは, 恩寵だけである。神の恩寵は, 人間が努力して得られるものではない。

M. Walser は, Paulus や Augustinus のそういう言を, 彼らの世界認識のリアリスティックな表現ではないかと言う。すなわち, 人間世界にはまさにそういう不均衡ないし不公平がまぎれもなく存在するという苛酷な認識である。

しかし人間はそういう現存在のいわば不条理なありかたを甘受することはできない。現実世界改

善の希望は絶えることはない。そして未来とかユートピアという希望の火花を渴望する。「あなたがたは希望によって救われている。しかし目に見える希望は希望ではない。というのは、現にだれかが見ているもの——それを、どうしてその人はなお待ち焦がれる必要があるのか。しかし、われわれが見ていないことを望むかぎり、われわれは忍耐して、それを待つ。」(Paulus: BR, 8-23)

6. 業績による義認, Max Weber『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

人間の一部は幸福に恵まれるが、残りの多くは恵まれない人生を送らざるをえない。この世の出来事は不公平に満ちている。神はほんとうに公正なのであろうか？ と人間の声上がる。神は神の欲する人間の上に恩寵を施すが、人間に選ぶ権限はない。

この不均衡をできうるかぎり緩和しようとする試みが歴史の進行につれなされてきた。まず信仰により、ついで人間の業績・仕事により、すなわち努力して得られる恩寵により、義認要求（正当性認定 *Rechtfertigung*）がなされてきた。

Martin Luther は、信仰と悔い改めにより義認への要求権を少しでも得ようとした。ルター以来神の恩寵は、得ることもできるし失うこともできるようになった。

職業 (*Beruf*) は神の召命 (*berufen*) であり、日々この職業労働にうまずたゆまず従事することが神の意に従い、神に奉仕し、神の栄光を讃えることになるというピューリタニズムの倫理こそ、現在に至る資本主義精神の基盤になったことを説いたのは、周知のように Max Weber である。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904~5) から約100年前 Goethe は『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796) で、社会に有用な人間になるためには、市民は働いて業績をあげねならない、と書いた¹。Robert Walser の *Jakob von Gunten* は「彼を雇う人の満足は彼の天であり、その悲しい反対は彼を滅亡させる地獄であるが、しかし彼と、彼がなすことに満足を与えるだろうということは確信している。」² (1908) と書いた。すなわちあるひとが何をなすのか（どういう業績をあげるのか=Werk）が、個人の存在の正当性証明を査定する。

7. 可視, 既知の Esau の教会 と 不可視, 未知の Jakob の教会

しかし資本主義が進み、その精神的倫理的基盤たる信仰やエートスが失われていくと、正当性証明は自力によるとする時代精神が広まっていく。それまではあらゆる出来事のなかに神の警告、罪、怒りの兆候を見たとすれば、いまは自分の仕事、自力、そこから生ずる自己愛のなかに、神からの恩寵を誤って読み取るようになる。ニーチェはこれを「恩寵とか救済の前触れと感じたものは、実は人間の自己恩寵、自己救済にほかならない」³ (『人間的、あまりに人間的』『宗教的生活』) と言う。

今日人が成功し幸福であれば、それは自力、すなわち自分の所業によるとする。それを神の恩寵と思う者は少ない。せいぜい偶然、ないししたいがいの人はこれが正当 (*Gerechtigkeit*) なのだと思う。義認はいわば天上に待つほかないというパウロ以来の教えに対し、現代では、ある人が成功し幸福であれば、天を待つまでもなく、義認はすでに充たされている。今日では自分の人生に起こっ

ていることが正しいのかどうかは、自分で判定できる。正であれ不正であれ、自分は正しいと感ずる。不正な目に遭っていると自分で言えるということは、実は自分が正しいと感じていることを示している。

この神なき自己義認、自力で義認（自己正当化）ができるという時代の精神風土に雷光を発したのが Karl Barth である。『ローマ書講読』初版は1919年、第2版は1922年。「神に対する人間、いかにして人間はいつか何らかのありかたで被告以外のものであるべきだということのか？」Kafka の『審判』執筆は1914～15年、『城』執筆は1922年、焼却するよう言われていた両作を含む遺稿の Max Brod による編纂刊行は1926～27年である。

「Esau の教会とは基本的に Jerusalem, Rom, Wittenberg, Genf といった唯一ありうる、目に見える、既知の教会である。[...] そして Jakob の教会も基本的には、ありえない、目に見えぬ、未知の教会である。延長も限局もない、場所も名前もない、歴史もない、あれこれの会員資格も除名もない教会であるが、このヤコブの教会にこそ神の自由な恩寵、召命、選抜がある。」(R.467) 教会による義認調停、神のいわば人間化という時代の風潮に対し、「あなたの人生に、神自身のみが与えることのできる義認が欠けているならば、あらゆる正当性認定も欠けているのだ」(R, 106) とバルトの雷鳴が轟く。

M.Walser は、Karl Barth においてわれわれにとっての希望の最大値は、神の啓示を受けとる人間は、ただ「失われた者として救われ、義認されえない者として義認される」(R. 560) と書いてあることだという。「神の不可視的実存性を直視することにおいて人間は救われるであろう」(R. 560) 「〈墓のある所にしか復活はない〉(Nietzsche: *Also sprach Zarathustra. Das Grablied.* N. II, 369)。しかし墓のある所に復活がある。教会が消えうせるところに教会は始まる。教会が不義とされたところに教会の義が始まる」。(R. 560)

さらに「未知の（知られざる）神として神は認識される。[...] すなわち、希望への希望なしにしか信ずることのできない神として」(R. 128)。「キリスト教は真理を肯定よりも否定のうちのほうに見る。」(R. 621)

これは Kierkegaard の、宗教的行為は苦悩で、啓示は秘匿で、信仰は懐疑で、すなわち肯定的なものは否定的なもので知られるということが宗教領域の特性だという認識と重なる。Nietzsche もまた「信仰厚い人間は宗教の人間の反対である」⁴と言う。

Karl Barth と Nietzsche。二人とも歴史の人間のさまざまな正当性認定（義認）を爆破しようとする。神殿建設であれ神殿破壊であれ、信仰深いキリスト者であれ不信仰の反キリスト者であれ、「おのれを廃棄できないで、イエスカノーとしておのれを自分で正当化（義認）しようとすることは、まさにそのことにより裁かれている」。(R. 188)

二人を結びつけるものは、現存するすべてのものが彼らには欠如（Mangel）と思われるということである。彼らは、教会であれ道徳的価値観であれ既存の正当性認定に満足はできない。それは未来への飢えへと彼らを突き動かす。人間は克服されるべき存在。新しい人間、新しい世界の蘇生。充足されるべき未来についてはしかし否定弁証法でしか表現できない。

かくして M.Walser は第7章に、講演にはなかった Karl Barth と Nietzsche についてのゼミナー

ルという章を新設する。

8. Karl Barth と Nietzsche, 否定弁証法運動

バルトの『ローマ書』とニーチェの『ツァラトゥストラ』の比較を、M. Walser は両著や両作者について（über）ではなく、とともに（mit）行いたいという。これは『ローマ書』第3版序文（Göttingen, 1922）で、注解者は「ある人について語るとは、その人を除け者にして勝手に語る」に等しいゆえに、「パウロについてではなく [...] パウロとともに書く」（R. 27f.）とバルト自身が言っていることを踏まえたものである。したがって引用句の多い一章であるが、その基本テーマは、1）神や未来への否定弁証的アプローチ、2）現存在の欠如を希望のばねにして、到達しえない新しい未来の生に無限に近づこうとすることである。Barth のいわゆる弁証法神学の真髄の一端である。

ここは刊行本で補足強化された、つまりその心臓部のひとつなので、その手法に習い、M. Walser 自身の原文を翻訳したい。

翻訳：刊行本，7－II（S. 62～64）

二人は〈歴史的人間〉を改造，克服，救済しようとする。二人は，その新しい人間ないし超人にとっての日付のできる，到達しうる未来を知らない。そして二人は，相互に差異がありえないような二つの言葉を話している。[...] しかし *Zarathustra* 本が終始，神は死せりというメッセージに貫かれており，Karl Barth の本も同じように，神はただ未知の神，すなわち希望への希望なしにしか信ずることのできない神としてしか認識できない，というメッセージに貫かれているとすれば，相互にいったいどのような差異があるというのであろうか？ [...]

Nietzsche と Karl Barth というこの二人を最も深く結びつけているのは，現在のなものによっては何も試みることはできないということである。バルトは，目に見える具体的なものの伝統や現在として支配しているものと少しでも契約すれば滅び，片付けられてしまう不可視性をほめたたえている。「神が神であるのはただ，神が死の死であるときのみであり，そしてそれがキリストの復活なのだ。そしてこの復活への信仰がなければすべてはむなし。」これがバルトの仮借なき厳しさである。「信仰はあらゆる人にとり同じ空虚への跳躍である。このような信仰はあらゆる人にとり同じように不可能であるからこそ，あらゆる人にとり可能なのだ。」（R. 139）

Zarathustra 時代ニーチェは，その遺稿ではじめて公刊された，したがってバルトが知りえなかった一文を書いた。すなわち「信仰ある人間は宗教的人間の反対物である。」バルトが初めから教会や社会で出会う信仰深い人間は，自分の信仰を肯定的な善，いわば飾り付けとしている人間である。宗教的な人間とは，自分には何もない，ということを知っている人間である。

翻訳：（S. 71～74）：二人とも，過去や現在に続く時間以上のものである未来なしにはやっつけていけない。二人にとって現在の人間は，未来を創る地盤である。この現実の現在がどのようにしてあの絶対的な未来に行きつ

くべきなのは、二人とも表現することはできない。しかし二人にとってこの到達できない未来ほど重要なものはない。

Zarathustra: 「[...] 何が到来しなければならないかの予見者でないなら、私はいかにして生きるすべを知ることができようぞ。」さらに「未来自体と未来へ至るひとつの橋——そしてああ、この橋のほとりのいわば身障者であること：そのすべてが Zarathustra なのだ。」(2.Teil, *Von der Erlösung*, N. II, 392)

Karl Barth が歩くことができるために一文一文はじめて創らねばならなかった道を証明できないことは、語りと言葉の運動そのものにほかならない Zarathustra の語りと言葉の運動とまったく同じように魅力的である。詩作。バルトの言葉はニーチェの言葉に勝るとも劣らぬ詩である。しかし二人の言葉は、詩と文学の区別が存在しなかった時代を想起させる。詩篇。新旧約聖書。SeuseやSwedenborg の言葉。Karl Barth は Zarathustra とまったく同じように言葉とダンスする。しかしそれは別々の言葉であって、否定とのダンス、すなわち弁証法のダンスなのだ。

「ある人が他の人にとって何者かであることはできる、ただし何者かであろうと欲することによってではなく、[...] 何者かであることによってではなく、おそらく何者でもないということによって、すなわちその貧困(欠乏)、その苦吟と希望、待つことと急ぐことによって、自分の存在のなかにあって、自分の地平線を越え自分の力を超えて行く他の存在を示すすべてのものによってである。」(R. 56)

キリスト教的なものは、もしそれが「空洞ではなく中味であり、凹面ではなく凸面であり、ネガティブではなくポジティブであり、欠如と希望の表現ではなく、所有と存在の表現であろうとするなら」(R. 59) 誤解である。これは、われわれに何が欠けていること、われわれに欠けているものは何であるかを、われわれに知らせるひとつの情熱、バルトの情熱である。この否定パレードのあとについてダンスするよう試みなければ、次の文に着地することはできない：「すなわち神が生かすときは、殺しながら生かす」。(R. 62) 仮借なき厳しさでバルトはつねにパウロを引用できる。「[...] 信仰は、信仰が何らかの意味で空洞以上のものであろうとすれば、不信仰である。」(R. 86) しかし信仰もまた義を行わない。「[...] というのは、神があまりにも近づきすぎないということは、なんという利得であろう？」という文がある。

次に残っているのはただ「そもそも場所ではなく、ただ神による人間の運動のモメントにすぎない場所である。」(R. 154) また別のところで「[...] <存在するものは>存在しないものとして認識されねばならない、存在しないものが存在するものとして呼びかけられうるためには。」(R. 194) この弁証法のダンスの歩みは、否定の否定を目標としてもつ運動の必然性に役立つ。そしてそれこそわれわれの死の死、ないしわれわれの非在の非在なのだ。そしてそれこそ、キリストはわれわれのために死んだ、と言われうるためのすべてなのだ。それは新しい人間を根拠づける事実としてのすべてである。しかしそのためにはくりかえし「それは一度もわれわれの生の内容ではなかったし、われわれの生の内容がそうなることもないだろう。なぜならそれはその本質においてあらゆる生の内容の批判的否定であるからだ。」(R. 220) そして「われわれの非在以外に新しい人間の別な存在があるわけではない。」しかし「死の死であるような死がある」(R. 194) ということこそ「聖なるメッセージの内容である」。(R. 228f.) ——以上翻訳終わり

神の不在が現存在の欠如を生む。欠如を座視できない二つの精神は、おのずから回る車輪のような、言語の否定パレード、弁証法のダンスをくり返しながらか、けっして到達しえない未来をめざす。

神や現存在の欠如から彼らはなんというエネルギーを生み出していることか。そこに M. Walser はバルトとニーチェの共通分母を見出す。二人にとり、非在の非在、死の死、無の無、否定の否定という、否定弁証法運動こそ、この世の生の正当性証明や、義認への絶えざるアプローチなのだ。

9. 恩寵（Karl Barth）と美（Nietzsche）による生の義認（正当性証明）

存在と非在、生と死、可視性と不可視性、信仰と不信仰、希望と絶望、現在と未来などの相互否定弁証法運動は、到達不可能の到達目標へと無限に自己回転を続ける。非時間的時間、非空間的場所、不可能な可能性、非在の存在、死からの蘇生、不可視の可視、不信仰の信仰、絶望の希望、未来の現在における啓示。それは Karl Barth においては恩寵（Gnade：神の恩恵、恵み）、Nietzsche においては美であり、〈新しい人間〉と〈超人〉ないし Dionysos である。

Karl Barth：「恩寵はつねに神の力、新しい人間、新しい自然、新しい世界の告知でありまたありつづける。恩寵はまたこの世では否定的、不可視、隠されたままである…恩寵は純粋な肯定、救い、慰め、建設である…」(R. 144)

Nietzsche：「現存在と世界はただ美的現象としてのみ正当化（rechtfertigen）されているようにみえる」(daß nur als ein ästhetisches Phänomen das Dasein und die Welt gerechtfertigt erscheint.) (N. I, GT, 131. 同様の表現, ibid. 14, 40)。

現代芸術のいわば福音となった芸術形而上学の核心であるこの『音楽の精神からの悲劇の誕生』の命題はいったい何を言おうとしているのか？

ニーチェによれば、たとえばギリシア悲劇神話の核である醜悪なものや不調和なものは、音楽における不協和音と同じく、人間に苦痛のなかで根源的快感を与える。個体化の原理という鎖を断ち切り、全一なる生の根源に帰依融合しようとする Dionysos 的衝動。これが自然の孕む二つの芸術衝動の一つ Dionysos 的芸術の効用である。

他方、芸術はたんに自然的現実の模倣であるばかりでなく、その形而上的補足でもあって、その克服のために、それに対置されたものである。悲劇的神話も音楽も、芸術のこの形而上的 Verklärung（光明化、浄化、変容）の意図からも生まれる。人間は、生きぬくために、生の不条理や不協和音の上に美のヴェールをかけて覆う壮麗な幻想を必要とする。これが美の仮象 Apollo 的芸術の意義である。

ニーチェは、ギリシア人が現存在の恐怖と凄惨を知っていたからこそ、生きることができるために、きわめて逼迫した必要から、そのぞっとする現存在の実相の前に Olympos の神々という光り輝く夢の産児を創造せざるをえなかったのだと言う。それはたとえていえば、刺のある灌木から美しい薔薇が生ずるのと同じだと言う。東洋風にいえば泥沼に咲く蓮の花であろう。

「生きつづけるように誘う、現存在の補足と完成としての芸術を生の中に呼びこむこのような衝動が、オリンポスの世界を成立せしめたのであって、そこにギリシア人の〈意志〉は光明化の鏡を眼前においたのだ。このようにして神々は人間の生を身をもって生きることによって、人間の生を正当化は認する（rechtfertigen）。このような神々の明るい日の光の下で人間の生は、それ自

体つとめて追求するに値するものと感じられるのだ。」(N. I, 30)

美によるこの世の生の是認、この世界と現存在(人間存在)の正当性認定である。「美的現象としてののみこの世の現存在は正当化されている」(「自己批判の試み」N. I, 14)という命題には *anzüglich* という形容詞が付いている。あてこすりの、人身攻撃を意図した暗示的な、毒を含んだ、みだらな、魅力的な(古)などの意味があるが、何への風刺、あてこすりなのか? 道徳ではなく、芸術が、人間の本来的に形而上的な活動であるという命題からみても、明らかにキリスト教道徳の世界観、現存在の道徳的解釈や価値づけに対する風刺ないし批判であろう。キリスト教の思考法価値観の背後にニーチェは、生に敵対的なもの、生そのものに対する怨恨と復讐心に満ちた嫌悪感を嗅ぎとる。それは終末、安息、没落への、つまり無への意志ではないだろうか。この道徳を前にして生の正当性は否認されるのではないだろうか。そうすると生は、否認の重圧に押しつぶされて、渴望に値しないもの、それ自体価値のないものと感じざれざるをえないだろう。この生の道徳的な価値観の価値転換、すなわち純粋に美的な、芸術的な価値教説が、この命題である。一言でいえば、*Antichrist* としての *Dionysos*。

「この民族(ギリシア人)が、かくも美しくなりうるためには、どれほど多く苦悩せざるをえなかったことだろう!」(N. I, 134)

M. Walser は、この『悲劇の誕生』の最後の言葉が言っているのは、あるものは美しくなければいけない、そして美しくなりうるのはただ苦痛、耐え抜かれた苦痛によるということだと強調する。絶対的権力者 *Zeus* の権力行使によって天涯の岩塊に鎖でつながれ、禿鷹に肝臓を喰いつばまれる *Prometheus* の「見よ、なんとという不正にわれは耐えしか!」という苦痛の叫びは、われわれに訴える。不協和音は作用する。心の平衡を失わせるように。しかし絶対的な不協和音は快い、ということこそまさに作用のひとつである。権力者と権力行使、それは醜い。いかなる運命にも耐えぬき生きぬこうとする生命の意志力こそ美しい。生命あるものは美しく、美しいものには生命がある。生命は現在をいきいきと生き、未来に希望をもつ。「われわれがあるものを美しいと思うことができるということは、われわれの最も未来に満ちた能力であると私は考える。」(100)

生命、美、希望、これらは Martin Walser 文学の核心である。

10. 未知の神 *Dionysos*

1889年正月から Nietzsche が書いた手紙の署名はただ「十字架に架けられし者」ないし「*Dionysos*」であったという。M. Walser はこれを心身崩落というような言葉で片付けてはならない、出発点が『悲劇の誕生』の根源である *Dionysos* 神発見、着地点が『ディオニュソス酒神讃歌(*Dionysos*=*Dithyramben*)』であるのはおのずから意味あることではなからうか、と言う。

「おお戻って来ておくれ、

私の未知の神! 私の苦痛! 私の

最後の

幸福よ!」(*Klage der Ariadne*, N.II, 1259)

とニーチェは Dionysos の恋人だった Ariadne に叫ばせている。すなわち、未知の神 Dionysos は、苦痛であるとともに幸福でもある。

「何のために私を責めさいなむのか、
意地の悪い未知の神よ！」（1256）

「おんみ、拷問史！
おんみ、絞首刑の神よ！」（1257）

「神自身が逃げ去ってゆく
私の最後の唯一の伴侶、
私の偉大な敵、
私の未知なる者、
私の絞首史の神よ！」（1258）

Nietzsche にとって Dionysos は Antichrist のシンボリック的存在であるが、もしかすると十字架に架けられし者の父に似た未知の神として、到達しがたき未来における蘇生という希望なき希望が暗示されているのかもしれない。実際八つ裂きにされたがのちに蘇生するという点で Dionysos と Jesus を重ねあわせる見方はロマン派にあった。Thomas Mann も『魔の山』の Peeperkorn に両者の融合像を描いた。⁵

「〈神の国〉は待つて得られるものではない。それは昨日も明後日もない。〈千年〉経っても来ない。——それは心のなかの経験である。それはいたるところにあり、またどこにも存在しない。」（*Antichrist* 34, N.II, 1197）「福音書への対立から教会が建てられた。」「基本的にはキリスト者はただ一人しかいない。その人は十字架で死んだ。〈福音〉は十字架で死んだのだ。この瞬間を境にして福音と呼ばれたものは、その人が生きたものの反対物であった。[…] 十字架上で死んだ人が生きたような人生のみがキリスト教的なのだ。——今日なおそのような生活は可能である。[…] 真の根源的なキリスト教はあらゆる時代に可能であろう…。」（*ibid* 39, S. 1200）「キリスト教において欠けているのは、キリストがなすべく命じておいたすべてのことを何ひとつなしていないということである。」（N. III, 657）「神を最も多く愛し、所有した者こそ、いまや神を最も多く失った。」（*Zarathustra*, N. II, 498）。

これはみなニーチェその人の言である。神は死んだ、というのは、既存の教会の神の死である。あるいは彼岸と此岸、真の世界と仮の世界、善と悪の価値判断の価値転倒である。真のキリスト者はただひとり十字架に架けられた者であると言ったニーチェは、八つ裂きにされた Dionysos と Jesus の死と再生に、おのれのけっして到来しない未来の神を重ねあわせていたのかもしれない。いずれにしろ Dionysos は、自己の拷問史絞首史でもある。自己はつねに克服されねばならない。死して成れの苦痛から生まれる快感と幸福が伴うが、死と再生、非在と存在、不可視と可視、苦痛と快感の否定弁証法運動は休むことがない。

11. Dionysos と Apollo

『悲劇の誕生』で Dionysos と Apollo は、自然が生み出す二つの根源的な芸術衝動の象徴とされている。陶酔と夢、音楽と造形、混沌と形象、破壊と創造、闇と光、激情と節度、衝動と精神、無意識と意識、真理と仮象、質料と形相などの対立原理である。周知のように Nietzsche は正負の符号こそ違え、Schopenhauer の意志と表象としての世界観を継承した。われわれの目に見える現象世界は、時間・空間・因果律に条件づけられたわれわれの表象 (Vorstellung) にほかならず、その根底には意味も目的もなく永劫回帰する盲目の根源衝動、すなわち意志、なかんづく生への意志 (Der Wille zum Leben) が蠢いている。根源的全一であるこの生きんとする意志が、時間空間因果律に制約された個体に客体化され、現実に現象、可視化されること、これが個体化の原理 (principium individuationis) である。Apollo 的なものとはこの原理、Maja のヴェールである。Dionysos 的なものとは、この個体を呪縛する鎖を破碎し、マーヤのヴェールをかなぐり捨てて、存在の母たちの国に下降し、根源的全一に帰依融合しようとする衝動である。

この意志と表象としての世界像は、Platon のイデアと個物、Aristoteles の質料と形相、Kant の物自体と現象を経て、Freud の無意識と意識、Heidegger の存在と存在者などにつながる世界像の根底をなす。Dionysos と Apollo もこの系譜につながるだろう。神とこの世の存在との関係こそかかる系譜の源であること、それが Esau と Jakob、可視的現実の教会と不可視的根源の教会という対比は、Apollo と Dionysos の原理と重なるのではないかという、Marin Walser の震撼的な指摘の意味ではないだろうか。

M. Walser は、K. Barth を読んで以来、Dionysos 的なものは Apollo 的なものに対する差異のなかでは表現できないのではないかということが、以前より明らかになったと言う。悲劇の起源は Dionysos であって、Apollo ではない。コーラスであって、ドラマではない。最古のギリシア悲劇には Dionysos の苦痛があった。「ギリシア演劇の有名な登場人物たち、Prometheus, Ödipus などはみな、あの根源的な主人公 Dionysos の仮面にすぎない。」(N. I, 61) Apollo と Dionysos という対比は、バルトの Esau と Jakob を想起してよいのではないだろうか？ (85) と Walser は問う。いつでも表象できるエルサレム、ローマなどの Esau の教会は、可視的な Apollo の現前と同じである。Jakob 教会と Dionysos は不可視で表象しがたい。しかしこの神こそ世界と生の母胎なのだ。

Dionysos とは、永遠に生成消滅をくりかえす宇宙や自然、そこに存在する生命、その生への、力への意志そのものを象徴しているのかもしれない。ニーチェの未知の神は、このような世界の根源的全一をあらわす Dionysos である。

Dionysos 的なものとは、Herakletos の流転と破壊の肯定と同じように、「対立と抗争への肯定を言うことであり…〈存在〉概念自体の徹底的な否定を言う〈生成〉」(N. II, 1111) であると、M. Walser は引用する。しかし逆に「〈生成〉変転に〈存在〉静止の性格を刻印することこそ、力への最高の意志なのだ」(N. III, 895) とニーチェ自身が力への意志としての芸術の項で言っている。生と芸術の関係は、やはり Dionysos と Apollo の相互否定弁証法運動そのもののなかで展開されると言ってもよいのではなかろうか。

結び： 言葉は神の創造へと通ずる、欠如、否定弁証法運動

M. Walser の1981年3月6日付け日記が刊行本の第9章に付け加えられた。

「言葉の展開はまったくおのずから神のようなものの創造へと通じている。神とはおそらく、存在する最も純粋な言葉である。純粋な語の言語性である。完全な言語存在である。言語的なものそのものである。神のなかで言葉は自己自身に達する。[...] 神がジャーナリストたちに言うとするれば。彼らはほかのだれよりもそれを必要とする、なぜなら彼らは、おのれが神とかかかわっていることを考えないで、言葉とかかかわっているからだ。すなわちわれわれのもつ最高のものは言葉から由来する。」(98)

言葉とかかわる者は、それゆえ、神とかかかわっているのだということ、夢忘れるなかれ、という忠告である。この世の存在の正当性証明、義認も同じである。これが M. Walser のわれわれへの遺言であろう。

この世は海辺に打ち寄せては返す波のように意味も目的もない無の永劫回帰である「無の支配」のなかで、無に抗い、存在や生の意味を創造するものこそ、言葉であると、M. Walser は言う（『無の支配』⁶）。言葉の芸術は、無から有への、意味ある生への、無意識の闇から意識の光りへの、神の創造につながる道である、というのが、M. Walser の論の核心であろう。「初めにロゴスありき。ロゴスは神とともにあった。言葉は神であった。」(Johannes, I, 1-4)。Logos は言葉、理法、理性と訳される。Heidegger によれば、ギリシア語 *λογος* は、ラテン語 *ratio*、ドイツ語 *Grund* に相応する。名詞 *λογος* の、動詞 *λεγω* には、第1、集め関係づけ計算する、第2、言うという意味がある。すなわちロゴスは、集積・計算としての理性であり、根拠づけとしての言葉である。⁷ 暗き深淵に神は光あれと言った。ロゴスには命があり、命は人の光であった。人間に与えた神の息吹が言葉である。『創世記』や『ヨハネ伝』冒頭の、神、ロゴス、言葉、命、光などについての註解は、Augustinus, Barth はじめあまたあり、また言語の起源はじめ言葉についての論は無数にあるゆえに、ここではこれ以上論じない。

私の詩神 (Muse) は欠如 (Mangel) であると、M. Walser は随所で述べている。何か欠けているから、人は読んだり書いたりする。欠けている者だけが、言う必要に迫られる。人間の精神活動の母胎は欠如態である。欠如があれば充足しようとする願望や意欲が生ずる。欠如こそ希望の原理 (Ernst Bloch)⁸なのだ。例えば、神。全能、遍在、不死など、われわれ人間に永遠に欠けているものすべてを備えているユートピアの願望像が神にほかならない。宗教は最初の文学である。危機に迫られた人間の集合が生んだファンタジーの願望像なのだ。神はまさに欠如ある者、抑圧された者だれしもが望む存在証明なのだ。言葉の母胎も同じである。何か欲しいから、言葉を発する。満ち足りた人には文学も宗教もいらぬ。欠如に対して人は言葉を必要とする。言葉の想像力による欠陥現実の補償充足が文学の根源のひとつだ。この世の生存の実相がぞっとする不条理と欠陥にみちたものであればこそ、生きぬくためには、生の補足と完成としての芸術を必要としたという、Nietzsche の Dionysos と Apollo 論に通ずるだろう。

M. Walser の創作の動機は、この〈欠如〉である。Barth も言う、「われわれに欠けているものは、

われわれを助けるものでもある。われわれを制限するものは、新しい土地である…。(R.61)では何に欠けているのか。自己意識、自己実現、そして当講演の主題たる自己の存在証明、正当性認定の欠如ないし危機である。

ニーチェもバルトも、既存のあらゆる正当性認定 (Rechtfertigung) を疑い、爆破したが、しかしあらゆる価値転倒、権威否定の先に、「新しい世界」「新しい人間」「超人」「未知なる神」を希望した。しかしそういう未来が現在になることも、未知が既知になることも、不可視が可視になることも、不在が存在になることもないだろう。それでも神の欠如によるこの世の存在の不条理、すなわち欠如に甘んずることはできない。現代は、神のみしか権限のない義認を忘れ、我の側に正義ありと自説を主張する、生の自己意識の数だけある自己正当性主張がはびこる。ニーチェもバルトも、自分たちには神が欠如しているという認識をバネにして、いかに生きるべきかを考える運動エネルギーにした。絶望こそ希望、不信仰こそ信仰、不可視こそ可視、不在こそ存在への道という否定弁証法運動は一刻の休みもなく未来へ向かっている。知られざる神としてのみ神は知られる。希望への希望なしにしか信ずることのできない神として。信仰は、なんらかの意味で空洞以上のもの、すなわち一抹の救済期待でもあれば、不信仰となる。神も自分も非在が存在と呼ばれるためには、存在は非在として認識されねばならない。われわれの非在以外に、新しい別の存在があるわけではない。

この否定弁証法でいえば、欠如こそ充足への、充足こそ欠如への道といえるかもしれない。欠如あるものは充足を望む。しかし充足に満ち足りると、そこに停滞、凝固、空洞化が始まる。力なきものは力を欲するが、力を得て権力化すると形骸化する。力への意志こそ生への意志であり、生命にみなぎり美しい。しかし充足固定形骸化した支配権力は醜い。美こそ生命のあかしである。この世の生は美しい現象としてのみその存在意義がある。生命あるものこそ美しい。泥沼に咲く蓮は美のシンボルである。「神の美しさが神を覆い隠している。」(Zarathustra, *Vor Sonnen-Aufgang* N.II, 414) 欠乏を母胎とする言葉による美の創造には、神の世界創造に通じるものがある。Martin Walser の86年を超える言葉による創造の根底を貫くテーマである。

しかしその創作は、現在の生の欠如という自覚から始まる。現代社会に生きるかぎり自己を含め人間を取り囲む生の危機、自己意識の抑圧の危機のなかで、いかに自己の存在証明を獲得するか。認定され権威化した正当性価値のなかで、いかに自己の正当性を見出すか。価値の同一性社会のなかで、いかに自己本来の生の意味を求めるのか。M. Walser の自己存在証明探求の道も否定弁証法運動である。しかし弁証法の展開の先に止揚や実現があるわけではない。運動そのものが生命である。

負の自己意識と自己否定のイロニーという同じ否定弁証法運動の聖者に、M. Walser は、Kafka やRobert Walser, Kierkegaard や Fichte をあげた。生涯にわたっていわば自我 - 非我ビリアードを通じ、真に安定した自己意識を演繹することに、ひとときだに成功せず、だから知識学遊戯を生涯営みつづけねばならなかったフィヒテ。自己の実存が停滞せず実感できうるためには、不信仰が信仰を、信仰が不信仰を促すような、いわば弁証法的な追い立て狼を一日たりとも中止することはできなかったキルケゴール。自己否定のイロニーは無に通じている。唯一耐えうる状態はこの仮借

なき追い立て猟そのものしかない。しかしこの否定運動は、意識に自己を自覚させるかすかな音を与える。知覚できるかできないかの存在証明（Identität）の音を与える。否定弁証法運動という厳しい追い立て猟が停滞すれば、生そのものも停滞する。⁹ 生の危機に面してもこれと闘う限り、生の運動はつづき、そこにかすかであっても自己の存在証明の音を聴きとることはできるだろう。同じように Barth にも、神の不在のなかに存在を、不可視のなかに可視のきわめてかすかな光を感じずる否定弁証法の聖者を、M. Walser は見ようとする。現代の正当性認定、生の存在証明追及の道も、このようなきわめて繊細な、けっして休むことのない否定弁証法運動そのもののなかにしか見出されないのかもしれない。言葉の美についても、慣用化された定型語彙ではなく、生の危機や欠如に対応して生まれる生きた言葉は、水のなかから背を現わし、飛び跳ねてふたび姿を消す魚の、沈みかける腹が銀色に光る瞬間のようなものだという¹⁰。無の支配に抗い、この世に生きる意味を与える力をもつのは、このような自己の内奥からほとぼしりである泉のような言葉である。生命ある言葉、無を支配する美のきらめく瞬間である。

「今日、ドイツは悪霊どもに絡みつかれ、一方の目を手で覆い、他方の目は恐怖の光景に吸いよせられながら、絶望から絶望へと堕ちてゆく。——いつドイツは奈落の底に達するであろう？ 究極の希望のなさから、信仰を超える一つの奇跡、希望の光が射しそめてくるのであろう？ ひとりの孤独な男は両手を組み合わせて呟くのだ、わが友よ、わが祖国よ、汝らの哀れなる魂に主の恩寵のあらんことを、と。」（Thomas Mann : *Doktor Faustus*. 傍点筆者）¹¹

トーマス・マンは1947年1月29日 Los Angeles は Pacific Palisades の丘の自宅で、ニーチェを念頭においた現代のファウスト博士＝音楽家 Adrian Leverkühn と祖国ドイツの崩壊を前にして、Serenus Zeitblom という語り手に希望なき祈りを呟かせた。究極の希望のなさから、信仰を超える奇蹟、希望の光がさしそめたのかどうかは、戦後68年のドイツの軌跡、そしてたとえば Heinrich Böll, Richard von Weizsäcker, Günther Grass, そして Martin Walser（本人は強く否定するだろうが）などの言葉の創造の軌跡に、その痕跡を見出すことができるのではなからうか？

Text:

Martin Walser (2012): *Über Rechtfertigung, eine Versuchung*, Rowohlt (Reinbek) 引用文はページ数のみ（例：12）

Martin Walser (1997): *Werke in zwölf Bänden* (=MW). Hrsg. Von Helmut Kiesel, Suhrkamp, Frankfurt/Main.

1970 *Selbstbewußtsein und Ironie* / 洲崎恵三訳 (1996) 『正負の自己意識とイロニー』法政大学出版局
Augustinus (1987): *Bekenntnisse*. Latein und Deutsch, übersetzt von Joseph Bernhart. Insel, Frankfurt/Main.
/ アウグスティヌス『告白』山田晶訳、世界の名著16（1994年版）

Die Bibel (1935) : nach der deutschen Übersetzung Dr. Martin Luther, Preußische Haupt=Bibelgesellschaft, Berlin

Karl Barth (1922) : *Der Römerbrief (Zweite Fassung) 1922* Hrg.von Cornelis van der Kooij und Katja Tolstaja
In: Karl Barth : *Gesamtausgabe II. Akademische Werke*, (2010) Theologischer Verlag Zürich (=R)

／小川圭治、岩波哲男訳（2001）『ローマ書講解』上・下、平凡社

Friedrich Nietzsche (1966): *Werke in drei Bänden*. Hrsg. von Karl Schlechta, Carl Hanser, München=N
(N.I,2で第I巻2ページを表す)

註：

- 1 J. W. Goethe: *Wilhelm Meisters Lehrjahre*. In: *Hamburger Ausgabe in 14 Bänden*. (1950) Bd. VIII, S. 290ff.
- 2 Robert Walser: *Jakob von Gunten* In: *Das Gesamtwerk*. Hrsg. von Jochen Greven, Bd. IV Kossodo/ Genf 1975, S. 380／『ヤーコプ・フォン・グンテン』藤川芳郎訳、集英社 1979
- 3 Friedrich Nietzsche: *Menschliches, Allzumenschliches :Das Religiöse Leben 134*, NI, 534f.
- 4 Friedrich Nietzsche (1980): *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, Hrsg. Von Giorgio und Mazzino Montinari, Bd.10, *Nachgelassene Fragmente 1882.1 (77)*, S.30 Deutscher Taschenbuch Verlag, de Gruyter, Frankfurt/ M.
- 5 洲崎恵三（2002）『トーマス・マン——神話とイロニー』、溪水社、94, 274ページ、参照。
- 6 Vgl. Martin Walser (2004) : *Die Verwaltung des Nichts*. Rowohlt, Reinbek bei Hamburg／洲崎恵三 (2009) 『言葉——無の支配、マルティーン・ヴァルザー』、『つくば国際大学紀要』第15巻、105~121ページ、参照。
- 7 Cf. Martin Heidegger: *Der Satz vom Grund*, Neske, Tübingen／注5、洲崎130~135頁参照。
- 8 エルンスト・ブロッホ『希望の原理』(*Das Prinzip der Hoffnung*) 邦訳（1982, 白水社）解題、保坂一夫『『希望の原理』の構想について』が、欠如態（Aristoteles）と希望やユートピアとの関係に関し、きわめてすぐれた哲学的歴史的展望を与えてくれる。Ernst BlochとMartin Walserには時代の共鳴性が感じられる。
- 9 Vgl. Martin Walser : *Über den Unerbittlichkeitstil—Zum 100. Geburtstag von Robert Walser*. In :MW. Bd.12, S.320／注4、201ページ、参照。
- 10 Martin Walser (2002): *Aus dem Wortschatz unserer Kämpfe*. Suhrkamp, S.239／注5、洲崎、109ページ、参照。
- 11 Thomas Mann : *Doktor Faustus*. In: *Gesammelte Werke in zwölf Bänden*. (1960) Fischer, Frankfurt/Main, Bd. VI, S. 676／『ファウストゥス博士』円子修平訳（1971）新潮社

（すぎき・けいぞう つくば国際大学非常勤講師）

Martin Walser 《Über Rechtfertigung, eine Versuchung》

Keizo Suzaki

Resümee (Deutsch) : Die eingeladene Rede in der Universität Harvard “*Über Rechtfertigung, eine Versuchung*”, die ein der repräsentativen Dichter in Deutschland Martin Walser im November 2011 hielt, fragt am Anfang: “Gerechtfertigt zu sein, das war einmal das Wichtigste. Staaten legitimieren sich durch Geste. Regierung durch Wahlen. Aber der Einzelne?” Karl Barth warnte in “*Der Römerbrief*”(1922) mit dem Blitz im Zeitalter der Rechthaberei, wo Rechtfertigung durch Rechthaben ersetzt wird, daß nicht der Mensch, sondern nur Gott die Recht hat, zu beurteilen. Nach Marin Luthers Lehre werde der Mensch allein durch den Glauben gerechtfertigt sein, nach Max Weber durch Werke im täglichen Leben. Aber im Laufe der Zeit, wo Glauben oder Ethos allmählich abhanden kam, glaubt man sich selbst rechtfertigen zu können. Der Weg zum unbekanntem, unsichtbaren Richter Gott ließe sich nur im Glauben als Hohlraum mit Hoffnung ohne Hoffnung, also nur in der restlosen Bewebung der negativen Dialektik finden, wie zwischen Sein und Nichts, Leben und Tod usw. Die Welt und das Dasein wird für Karl Barth als Gottes Gnade, für Nietzsche als ästhetisches Phänomen gerechtfertigt sein. Für Martin Walser führt die Sprache zur Erschaffung von so etwas wie Gott. Es ist die Verwaltung des Nichts, sich gegen das leer sinnlose Nichts durch die lebendig schöne Sprache zu wehren. Die Sprache ist der Ausdruck des Mangels. Sie zeigt, was fehlt. Der Mangel ist M.Walsers Muse.

Schlüsselwörter: 1. Rechtfertigung, 2. Rechthaberei, 3. Rechtfertigen darf nur Gott, nicht der Mensch (Karl Barts *Römer*), 4. Negative Dialektik, 5. Nur als ästhetisches Phänomen ist die Welt und das Dasein rechtfertigt

Abstract (Englisch):The guest speech in the Harvard University “*About justification—a temptation*” which one of the representativ Authors in contemporary Germany Martin Walser hold on the 9.11.2012, asked at the biginning: “It was most important for man to be justified. States legitimatize themselves by laws. Goverments through elections. But the individual?” Karl Barth gave the alarm like a thunderbolt in the age when justification is replaced by selfjustification, that only god, not human being, has the right to judge. Martin Luther: man can be justified by faith and repentance. Max Weber: through daily works as the ethos of puritanism. But losing the belief and ethos, man began to think that everyone can judge for themselves. The way to the unknown, invisible supreme judge God could be find only in a believing as empty space with hope without hope (K. Barth), and in the unending movement of the negativ dialectic between being and nothing, life and death and so on. The existence in this world can be justified only as the grace of God (K.Barth), or only as aesthetic phenomenon (Nietzsche). Martin Walser says that the language may lead to the

creation like that of the god. The creative language could give us the meaning of the being in this world, which is for itself nothing.

Keywords: 1. justification, 2. dogmatism, 3. Only God has the right to justify, 4. the negativ dialectic, 5. The being in this world can be justified only as aestetical phenomenon.